

427 子宮内膜症の薬物治療の治療効果判定におけるMRIの有用性に関する研究

島根医大, 同放射線科*

岡田さおり, 高橋健太郎, 岡田正子, 栗岡裕子, 北尾 學, 杉村和朗*

【目的】 Magnetic Resonance Imageing (MRI)は子宮内膜症の補助診断法として有用である。今回、MRIは薬物療法施行時の治療効果判定の手段になりうるかどうか検討することを目的とした。

【方法】 1. 子宮内膜症性嚢胞24病変を対象とし、嚢胞内容液の密度と含有鉄量を測定し、術前撮影した嚢胞のMRIの信号 (signal intensity, T1値, T2値) と比較検討した。2. ダナゾールまたは、ブセレリンによる薬物療法を施行した子宮内膜症患者20名を対象とし、治療前後にMRIと腹腔鏡を施行した。治療終了後6カ月時の再発の有無により、予後良好群 (13名) と不良群 (7名) に分類し、各々の子宮内膜症性嚢胞のSI, T1値, T2値および体積を治療前後で比較検討した。

【結果】 1. 嚢胞内溶液の密度と含有鉄量, および含有鉄量と T2SI, T2値との間には有意な正の相関関係が認められた。2. 両群とも治療により体積の縮小が認められたが、縮小率において有意な差は認められなかった。3. 予後良好群において T2値, T2SI, T2SI/MSI は有意な低下を示したが、予後不良群においては上昇傾向が認められた。4. 予後良好群では治療前の T2値, T2SI, T2SI/MSI とその変化量との間に有意な正の相関関係が認められた。【結論】 MRI のT2強調画像は内溶液の密度, 含有鉄量を反映し、内溶液の性状の推定が可能である。MRI はチョコレート嚢胞の大きさの変化ばかりでなく、その信号強度を測定することで、薬物療法施行時の治療効果推定が可能であると思われる。

428 卵管内腔評価法を用いた子宮内膜症合併卵管の検討

藤保大

塚田和彦, 澤田富夫, 大原 聡, 青木豊和, 白木 誠, 河上征治

【目的】 卵管内腔の評価法は現在未だ確立されたものがない。我々は salpingoscopic score (以下 SS-Score) を設定し、本スコアを用いて卵管内腔を評価するとともに、子宮内膜症合併例の卵管内腔を本スコアにて検討した。【方法】 卵管内腔の観察は外径0.5mm-0.7mm の極細径卵管鏡を用いて経腹的及び経子宮腔的に実施した。対象症例は子宮内膜症と診断されたR-AFS分類でⅠ期 2例, Ⅱ期 3例, Ⅲ期 4例, Ⅳ期 4例の計13症例, 24卵管である。卵管内腔評価は各卵管を峽部, 膨大部, 采部の3部分に分けそれぞれ, patency, epithelium, vascularity, adhesion, others の各項目に1~4点のスコアを配し、これらの合計スコアを計算した。12>normal, 13-15 mild, 16-19 moderate, 20<severe と分類し本スコアより子宮内膜症合併卵管の評価を行なった。【結果】 Ⅰ期内膜症ではSS-Score 14.3, Ⅱ期で16.4, Ⅲ期で16.1, Ⅳ期で20.0であった。又Ⅱ期以上の内膜症合併例20卵管についてみると tubal fold abnormality が12卵管 (60%), hypervascularity が16卵管 (80%) に認められた。【結論】 外見上正常に観察される卵管においても内腔上皮を極細径卵管鏡により検討することにより異常を見出すことができる。これら異常が内膜症合併不妊症例における不妊原因の一因とも推測され今後の症例の更なる検討とSS-Score の有用性の有無を実証していく必要性が示唆された。